

本橋成一とロベール・ドアノー 交差する物語

Motohashi Seiichi & Robert Doisneau Chemins croisés

2023年6月16日(金)ー9月24日(日) 東京都写真美術館 2F 展示室



写真や映像は、相手に対する想いとイマジネーションだ。

—— 本橋 成一

本橋成一『世界はたくさん、人類はみな他人』かもがわ出版、2019年、p. 130

相手をこよなく愛してこそ、写真を撮ることが許されるのだ。

—— ロベール・ドアノー

ロベール・ドアノー、ジャン＝クロード・ゴートラン『ロベール・ドアノー』タッセン・ジャパン、2003年、p. 177



このたび東京都写真美術館では「本橋成一とロベール・ドアノー 交差する物語」展を開催いたします。

本橋成一は東京に生まれ、50年以上にわたり、写真と映画によって、揺れ動く社会とそこに暮らす人々の姿を記録してきました。一方、ロベール・ドアノーは、パリや自身が生まれたパリ郊外を舞台として、常にユーモアをもって身近にある喜びをとらえてきました。生まれた時代・地域が異なる二人の写真家ですが、奇しくも炭鉱、サーカス、市場など、同じテーマによる優れたルポルタージュを残しています。そして、それぞれに第二次世界大戦による混乱を経験した二人は、慎ましくも懸命に生きる人々の営みの中に、力強さと豊かさを見出し、失われゆく光景とともに写真に収めてきました。多くの対立、紛争の絶えない現代において、人間に対する際限のない愛情と好奇心が生み出す視線、そしてユーモアや優しさをもって現実や社会と関わった二人の写真家によって編み出される物語を通して、生きることの豊かさについて考える機会となれば幸いです。

左) 本橋成一《羽幌炭砦 北海道 羽幌町》〈炭砦〉より 1968年 ©Motohashi Seiichi

右) ロベール・ドアノー《4本のヘアピン、サン・ソヴァン》1951年 ©Atelier Robert Doisneau / Contact

本展のみどころ

二人の写真家の出会いから生まれる、新たな物語

1991年、本橋は敬愛するドアノーに会うため、フランスに向かったものの、飛行機の到着が遅れてしまい、ドアノーと会うことは叶いませんでした。しかし、約束の場所には写真集『La Compagnie des Zincs』（カウンターの輩）が託され、そこにはドアノーらしいユーモアを含んだメッセージが添えられていました。

本展は、この一冊の写真集とメッセージによって結ばれた二人の写真家の物語から着想を得て企画されました。

この度「交差する物語」というタイトルのもと、約30年の時を経て、本橋とドアノー、そして彼らの作品と出会う、鑑賞者一人ひとりの新たな物語が幕を開けることでしょう。



本橋、カウンターの輩には気をつけたまえ。
僕は奴らにとことんやられてしまったからね。

—ロベール・ドアノー 1991年6月

懸命に生きる市井の人々への真摯なまなざし

生まれた国も年代も異なる本橋とドアノー。彼らには、作品のテーマや、写真への向き合い方、語られた言葉の数々に、意外にも多くの共通点を見出すことができます。

ともにヒューマニズム写真家として知られ、懸命に生きる

市井の人々に寄り添い、人間の尊厳や日常の中の小さな幸福がきらめく瞬間を写真に収めてきました。

彼らに共通する、ときにユーモアや安らぎをも感じさせる、人間への関心と愛情に満ちたまなざしは、困難をともなう時代を生きる私たちにとって、日々の中に豊かさや希望を見出すためのヒントになるはずです。

フランソワ・カラデック、ロベール・ドアノー

『La Compagnie des Zincs』セゲール社、1991年

本橋成一、ロベール・ドアノーの日本未公開作品を出品

本展は、本橋が50年を超える活動の中で取り組んできた作品と、ドアノーが残した45万点を超える写真から精選した作品に加え、東京都写真美術館のコレクションにより構成されます。彼らの代表作に加え、本橋成一《沖縄 与那国島》（1988-1989年、11点）、《家族写真》（1986-2022年、9点）は美術館初展示となります。また、ロベール・ドアノーによる、フランス北部の炭鉱で働く坑夫たちのルポルタージュ（1945年ほか、計6点）、さらに、晩年にパリ郊外の風景をカラーで記録したシリーズ〈DATAR〉（1984年、計16点、うち一部日本初公開を含む）を出品します。本展では、誰もが知る名作と同時に、作家の知られざる一面を伝える、日本未公開作品をあわせてご鑑賞いただける貴重な機会です。

出品予定点数 | 計236点 うち本橋成一 125点、ロベール・ドアノー 111点

展覧会構成

第1章 | 原点

第2章 | 劇場と幕間

第3章 | 街・劇場・広場

第4章 | 人々の物語

第5章 | 新たな物語へ

*この世界に生きる喜び、またそこで起こる出来事を目撃できる喜びを
刻印する方法として、私は写真を撮ってきたように思う。*

————— ロベール・ドアノー

ロベール・ドアノー『ロベール・ドアノー写真集 パリ・ドアノー』佐藤正子訳、クレヴィス、2012年、p.68

見る人は、そこから物語を勝手に紡ぎ出す。大切なのは、やっぱり「イマジネーション=想像力」なのだ。

————— 本橋成一

本橋成一『世界はたくさん、人類はみな他人』かもがわ出版、2019年、p.131

章解説と主な出品作品

第1章 | 原点

二人の写真家としての始まりは、汗水流して働く労働者など、その時代に社会の渦の中で、慎ましくも懸命に生きる人たちの姿に見る、誇りや輝きにありました。そして、残酷な現実を突きつける社会批判ではなく、あくまでそこに暮らす人々の生活や精神に寄り添いながら、彼らの尊厳を写真に切り取りました。



1_01_MS



1_02_MS



1_03_MS



1_04_RD ※日本初公開



1_05_RD ※日本初公開



1_05_RD

1_01_MS 《羽幌炭砦 北海道 羽幌町》〈炭鉱〉より 1968年／1_02_MS 《福岡 筑豊》〈炭鉱〉より 1965年／1_03_MS 《静夫と妹 福岡 鞍手町》〈炭鉱〉より 1965年 すべて本橋成一 ©Motohashi Seiichi

1_04_RD 《サン・ミシェル炭坑、ロレーヌ地方》 1960年／1_05_RD 《坑夫、ランス》 1945年／05_RD 《エペール広場の子どもたち、パリ》 1945年 すべてロベール・ドアノー ©Atelier Robert Doisneau / Contact

第2章 | 劇場と幕間

二人の写真家は生まれた時代・地域が異なりますが、奇しくも同じテーマによる作品を残しています。パリを劇場に見立てたドアノーと、上野駅や築地市場を広場と考えていた本橋にとって、サーカスや芸能は一人の観客となり、劇場や広場をその時代の風景としてとらえるための要素に満ちた理想的なモチーフでした。



2_01_MS



2_02_MS



2_03_MS



2_04_RD



2_05_RD



2_05_RD ※日本初公開

2_01_MS 《木下サーカス 東京 二子玉川園》 1980年／2_02_MS 《木下サーカス 三重 四日市市》 1979年／2_03_MS 《木下サーカス 東京 二子玉川園》 1980年 すべて本橋成一 ©Motohashi Seiichi

2_04_RD 《ファニー・サーカス》 1951年／2_05_RD 《ピンダール・サーカス》 1949年／2_05_RD 《アマール・サーカス、バイヨンヌ》 1951年8月 すべてロベール・ドアノー ©Atelier Robert Doisneau / Contact

第3章 | 街・劇場・広場

ドアノーは生きる人々の集積であるパリという都市を自分の小さな劇場として、本橋は雑多な者同士が共存する空間を広場として、人々のドラマをとらえ続けました。そして、二人の写真家は、レ・アール市場や築地市場など失われていく風景とともに、人々の営みのなかにあるエネルギーに魅了されていきました。



3_01_MS



3_02_MS



3_03_MS



3_04_RD



3_05_RD



3_05_RD

3_01_MS 《上野駅 東京》 1981年 / 3_02_MS 《築地市場 東京》 1984年 / 3_03_MS 《築地市場 東京》 1984年

すべて本橋成一 ©Motohashi Seiichi

3_04_RD 《“音楽好きの肉屋、パリ”》 1953年 / 3_05_RD 《“マドモワゼル・アニタ、パリ”》 1951年 / 3_05_RD 《“リヴォリ通りのスモックたち”》 1978年 すべてロベール・ドアノー ©Atelier Robert Doisneau / Contact

第4章 | 人々の物語

本橋は、爆発事故*から5年後の1991年にチョルノービリ（チェルノブイリ）を訪れ、写真作品のみならずドキュメンタリー映画を制作しました。また、ドアノーはパリ郊外のロマヤ、第二次世界大戦中に自身の疎開先であったサン・ソヴァン村を再訪し村の結婚式の様子を撮影しました。二人の写真家は、その土地の自然や、人々の暮らしの中の喜びにカメラを向け、繰り広げられる人々の物語を写し取りました。そして、すぐそばにある小さな幸せを掬い上げ、それらを見つめ、感じることでどれだけ豊かな経験なのかということ、私たちに気づかせてくれます。

*1986年、旧ソビエト連邦ウクライナ共和国のチョルノービリ原子力発電所で起きた原子力発電所開発史上最大（当時）の爆発事故



4_01_MS



4_02_MS



4_03_MS



4_04_RD



4_05_RD



4_06_RD

4_01_MS 《ベラルーシ共和国 チェチェルスク》 1992 年 / 4_02_MS 《ベラルーシ共和国 チェチェルスク ハローチェ村》 1993 年
 4_03_MS 《ウクライナ共和国 プリピャチ》 1992 年 すべて 本橋成一 ©Motohashi Seichi
 4_04_RD 《“4本のヘアピン、サン・ソヴァン”》 1951 年 / 4_05_RD 《“若い新郎新婦のろうそく、サン・ソヴァン”》 1951 年 /
 4_06_RD 《ロマの家のパイプと哺乳瓶、モントルイユ》 1950 年 すべてロベール・ドアノー ©Atelier Robert Doisneau / Contact

第5章 | 新たな物語へ

ドアノーはパリやパリ郊外という都市の魅力や、人々のユーモアとエネルギーを、本橋は異なる背景をもつ人々が家族や共同体として共存することの尊さを物語として紡いできたのではないのでしょうか。彼らはいかなる時代・地域においても、そこに生きる人々の存在や風景に隠された幸せを、そっと私たちに見せてくれます。



5_01_MS 〈家族写真〉より 1994 年 / 5_02_MS 《沖縄 与那国島》 1988 年 すべて本橋成一 ©Motohashi Seichi ※美術館初展示





5_01_RD



5_02_RD ※日本初公開



5_03_RD ※日本初公開

5_01_RD 《雨の中のチェロ、パリ》 1957年／5_02_RD 《グランド・ポルヌ（集合住宅群）、エルブ広場》 1984年10月／

5_03_RD 《グリニー・ラ・グランド・ポルヌ》 1984年10月 すべてロベール・ドアノー ©Atelier Robert Doisneau / Contact

作家略歴

本橋 成一 | Motohashi Seiichi

1940年東京・東中野生まれ。1960年代から市井の人々の姿を写真と映画で記録してきた写真家・映画監督。1968年「炭鉱〈ヤマ〉」で第5回太陽賞受賞。以後、サーカス、上野駅、築地魚河岸などに通い、作品を発表。写真集『ナージャの村』で第17回土門拳賞、映画「アレクセイと泉」で第12回ロシア・サンクトペテルブルグ国際映画祭グランプリを受賞するなど国内外で高い評価を受けている。

ロベール・ドアノー | Robert Doisneau

1912年パリ郊外のジャンティイ生まれ。エコール・エスティエンヌで石版を学び、写真家アンドレ・ヴィニョーの助手となる。自動車会社ルノー社のカメラマンなどを経て、1939年フリーとして活動を開始。特にパリの庶民たちの日常をとらえた写真で高い評価を得て、ニエプス賞（1956年）、フランス国内写真大賞（1983年）など受賞多数。1994年逝去（享年82歳）。

公式図録

『本橋成一とロベール・ドアノー 交差する物語』平凡社発行

2,600円（税抜）、全244頁

作品図版（一部出品作品を除く）と作品リストを掲載。本橋成一（出品作家）、フランシーヌ・ドルディル（アトリエ・ロベール・ドアノー共同代表）、クレモンティーヌ・ドルティル（ジャーナリスト、映画監督、美術史家）、山田裕理（東京都写真美術館学芸員）によるエッセイを収録。

関連事業

映画監督としても国際的な評価が高い本橋成一の映画作品「ナー ज्याの村」(1997年)、「アレクセイと泉」(2002年)、「アラヤシキの住人たち」(2015年)を当館1階ホールで上映するほか、本橋成一とロベール・ドアノーに関連するスペシャルトークを実施いたします。また、担当学芸員によるギャラリートークや手話通訳付ギャラリートークなどのイベントを開催予定。

※そのほか詳細決定次第、ウェブサイトでお知らせします。

開催概要

展覧会名[和] 本橋成一とロベール・ドアノー 交差する物語

展覧会名[英] Motohashi Seiichi & Robert Doisneau Chemins croisés

[モトハシセイイチ アンド ロベール・ドアノー シュマン・クロワッセ]

*Chemins croisés [仏]: 交差する物語 (=Narrative Passages [英])

主催 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

後援 | 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、J-WAVE 81.3FM

助成 | 公益財団法人 花王芸術・科学財団

協賛 | 東京都写真美術館支援会員

特別協力 | アトリエ・ロベール・ドアノー、コンタクト、ポレポレタイムス社

会期 | 2023年6月16日(金) - 9月24日(日)

会場 | 東京都写真美術館 2階展示室 (東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内)

開館時間 | 10:00 - 18:00 (木・金曜日は 20:00 まで、入館は閉館の 30 分前まで)

休館日 | 毎週月曜日 (ただし、月曜が祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

入館料 | 一般 800 円 / 学生 640 円 / 中高生・65 歳以上 400 円

*小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)、年間パスポートご提示者は無料。

[TEL] 03-3280-0099 [Web] www.topmuseum.jp [Twitter] @topmuseum [Instagram] topmuseum

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよび和英いずれかクレジットの表記をお願いします。

* オンライン媒体への図版掲載は作品保護の観点から長辺 800~1000 ピクセル以下をご利用ください。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会企画・担当 山田裕理 / 副担当 関 昭郎

広報担当 平澤 / 池田 / 鈴木(彩) press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。